政治的・法的・宗教的・文学的・芸術的等々の要因を指摘している。経済のほかに親族、社会、政治、宗教、思想、芸術、意識などの要素が存在するとしてまず問題になるのは、それらの要素がどのように構成されているかを知る努力が必要である。さらに、それらが相互にどのように関係にあるか、ひいてはそのような関係をどのように取り組むか、時間経済決定主義、極端な経済選択主義の数には逃げることが強くもとめられる。これの別の角度からいえば、それぞれの要素が互いに影響を及ぼし、相互関係を整備することによって、それぞれの要素が自立して存在することはあるにあらずである。互いになんらかの関係をもっている。その意味では彼らの要因が完全に自立して存在することは殆どありえない。ただ、そこから構成主義がしばしば険しい、または、全体の要因を構成を定めるのは要因システム間の関係だけだとするのは偏り過ぎてはいる。相互関係が影響されていないものである。アルチューセールのモデルでは、経済的、社会的、教義的、親族的、宗教的・文学的・芸術的等々の要因を含んでいる。ただし、経済決定主義の経済は自由体であるが、経済的、社会的、教義的、親族的、宗教的・文学的・芸術的等々の要因が経済学的体系である。マルクスはまた国家・政治・支配についての本格的な理論形成にまで進まなかった。そのためにマルクス主義では伝統的に経済外のそれら構造を指摘している。
ある理由があって発生しきる存在している。ヒトが動物的な状態から幾分なりと人間らしい状態に移りつつあったとは、二百万年程前の時代から、意識とか宗教の意識というような要素は芽生えつつあったのである。ではその前の四百万年か五百万年はどうだったのだろうか。現在得られている人類進化学の知見によれば、意識ということは、高等人間類であり、高等意識・宗教的意識等を持たなかったであろう。道具の利用も殆どないのに近かったであろう。したがってヒトがこのような意識・意識・宗教的意識等を持たなかったというって良いであろう。ここを注意しなければならないのは、高等人間類その他の動物とヒト・人間との区別されるメルクマール何が何であるであろう。ももしくこれは古来からさまざまな経験を含むさまざまな人々によって繰り返し問い立ててきたテーマである。ヘーゲル流にいえば、どのような意識が生活を規定するのではなく、生活が意識を規定するというテー
を道徳、宗教、形而上学その他のイデオロギーおよびそれらに対応する意識形態は、もはや独立性のみせかけをもたなくななる。それらはなんら歴史をもたず、なんら発展をもたない、というように大変に強硬に調子になっている。歴史
哲学・精神現象学などに象徴されるヘーゲル流の極端な観念論への批判の見地から、「生活が意識を規定する」という唯物論が提起されている。それはそれとして意味があるが、人が自らを動物と区別し始めるとされる「生産＝労働」自体がじつは意識によって裏づけられていることも否定できない事実である。ヒトの意識・判断をもってヒトが生産を行うようになったとは考えにくく、おそらく「意識」を持っていったであろう。なんらの意識・判断をもたず、ヒトが生産を行うことによる他の霊長類でもある程度あるといえそうである。ヒトは「生産」を始めるまえにお
の「心像」のなかになかったものとしての形態である「労働」にかんが、人間は労働をとおして労働過程の始めに「心像」のなかにはいない。これは目的性・合目的性こそが人間の労働を特徴づけるもので存在していた結果を労働をつうじて引き出すのである。この意識性・合目的性こそが人間の労働を特徴づけるもので存在していた結果を、ヒトの行動なればこなたのである。動物から人間を区別するメルクマールである「生産」にじつは「心像」の目的性が前提され基礎になっている。この事実からすれば、人間を人間らしくしているものは生産で、意識は生産によって支えられている生活の「昇華物」である。意識の独立性は「みせかけ」にすぎず、意識の独自性を抹消しようとす
ちろん生活手段の獲得についても、思考力・知識・技術の利用・道具の創出と利用が伴うようになる。経済活動にも

契機はその行為の意識性による。ところが人間が他の動物と明確に区別される契機としてその意識性・意欲・思考力等が浮び上がってきたことである。もともと稲穂類のなかでひとつだけニューエンリックなる種にしてヒトが現れるようになっていたのは立ってこざるをえな

サイクルの精密な運動などが可能となったことによくって脳の機能が高級化した。そのため人類独特の思考、言語、記憶、手

ヒトがヒトらしく、あるいはヒトが人間らしくなくなったのは、ヒトがヒトらしくなくなった最大の決め手はなにかの契機・理

この事実からすれば、脳の特異な進化がヒトのヒトたるメルクマールになる。あるいはそれにもとづいて起こる思考・言葉・

概念の創出・制度・法規の創出・道具・技術の創造と利用などに、ヒト科の特徴が色濃く表われているといえる。も
思考力・意志・意識などが大変に重要な要素として入っている。人間のさまざまな行為・創出物には殆どすべての事柄に影響を与え、その存在を支えていると考えられている。

このことが関連するといえようが、マルクスとエンゲルスも述べた『生産』という動物と人間のメルカトルを定義する文章のすぐ前に、「人間は意識によって、宗教によってそのほか任意なものによって動物から区別されることできる」とも述べている。『意識』の存在を全く既に軽視してしまっているわけではない。人間をめぐる社会・歴史をめぐり意識に関連することが余りにも多いだけに、意識とは何か何かに発するのか、何によって規制されるのかを大変に重要に考えることができる。さらに、そのような機能をヒトの脳が果たすべきあいまったくの空間から始まるのではないかということが注意される。

いわば、ヒトの脳は予め独自の概念・構造・機能の成型を行なう。ヒトの脳は予め独自の概念・構造・機能の成型を行なう。これを受け入れた脳は情報の解析・判断・感情の決定・論理的な認識・対応のための意気・意気決定などの高度に複雑な機能をはたす。その機能の回路や機能の型も独特な安定を保ちながらあるが強い誘導を帯びているのではないかと考えられる。詳しくは心理学
や大脳生理学などの成果・研究に学ばねばならないが、ともかく人間の意識・心理・表象・宗教・文化などを脳の構造が規定する面があることは間違いいないところであろう。十九世紀には心理学や大脳生理学の発達は殆んどといってよいほどみられなかったから、マルクスやエッジセルズがヒトの脳の構造・機能を独立の因子として考えなかったことも責めることはできない。しかしこなきな諸学の高度の発展を見た今日ではこの事実を無視して良いことはならなくなた。

一方では機能が一定の範囲に限られるがであろ、しばしばそれは特有のプレを伴いつつ、経済だけではなく他の多忙な面の行動・生活・人間を取り巻く広大な自然その他の環境に反応・判断し意識・意欲を形成するといえよう。

一部の政治・学問などのマルクスのいわゆる上部構造が人間特有の創造物であることは、その自然的帰結であるといえはいない。上部構造は経済生活・経済活動に関わり、それによって規定される面もあるけれど、到底それだけには限られず独自性・自律性を有することを認めないわけにはいかない。上部構造を生み出し続けること、どこにそのようなものとして発生しないかは造り出されている。

この点からすれば、種々の上部構造的な諸要因が生み出され創り出されたのは、それ自体として必然である。それらが生み出されるのは経済生活がますますその反映様式に限られるわけでもないし、経済生活から派生してのみとめられるか。
に場当り的に幾分か乱雑にそのような行為をするわけではないということであろう。発達した頭脳によって意識し判断し、他の諸種の生活の側面とのバランスを保つようにさまざまな配慮をしている。発達した脳はヒトの社会集団をあらゆる限られた範囲のせいか数人ではあるわない、「頼見知り」の集団にする強い傾向を持つている。その集団の成員として認識されるには一定の要件がともわれられる、成員同士ではもちろん互いの顔はもちろんそれぞれの個々の諸々の属性、性格良好見知っている。またその範囲で調整をとりなしながら協力し合い生活をしている。集団の成員、他でもお互いを結び合う心の絆を持ち、集団へのアイデンティティ、デルケムが強調するような、を持って生活している。
が発見されれたわゆる「農業革命」が起こったものである地域では、近年の何千年乃至は一万年の期間にわたる経済生活・相互の集団としては親族とは異なる地縁共同体が中心的な役割を演じてきている。それだけ親族・家族などの血縁共同体が社会生活において演じる役割は定範囲に限られるようになっている。それぞれの親族・家族がそれぞれの経済生活・医療・教育などのサービスを提供するという状態が生まれ、この傾向はさらに増幅される。さらにつけ加えると近代の資本主義社会では、経済生活を営む親族が小規模になり、また親族・家族成員の相互の活動の内容も薄くなる傾向にある。

このような事実を考慮するなら親族が個有の根拠である発生・形成されるものであり、その自律性をもつ——他に宗教における「夢幻界」（マルクス『資本論』①大月書店九八頁）——精神の錯覚、あるいは経済生活ないしは現実生活の反映形態であると片付けてしまうわけにはいかない。そのように解しては殆んどすべての社会あるいは時代に宗教が発生・存在し絶えないという事実の理由を見失ってしまう。最近のイラン革命や社会主義国での宗教の根強い存続、
にも宗教の根元の証を発見することができる。宗教は人間が生存し社会が存在するということに伴ってその独自の
源泉から形を帯びようにに発生することが多い。何故だろうか。端的にいえばそれは人間が発達した脳・脳細胞を
持っている点にともなわれよう。他のすべての動物は宗教を持たないが、ひとり人間だけがその発生以後のいつからか
かかり早い時期に、すでにとえる程に宗教を生み出している。おそらくそれはヒトがその頭脳から生みだした
ものであろう。財貨のようにヒトの手足の作業によって生活をしれて化け、神話が作り出され、儀礼が定められた。
このように宗教は脳によって生み出されるが、それが生み出される理由はヒトが高度に発達した頭脳を持っているからに
他ならない。脳の機能によってさまざまな微妙な心の動き情結のゆれ動きがあり想いがぐらぐら考えられる。その
ために宗教が発生するのである。道具を使い音声によってコミュニケーションする動物はあっても宗教を持つ動物は
一例。その理由は上述のように宗教はヒトが高度に発達した頭脳を備えるようになっていったことによるとつくからである。その
自然界の暴風雨、地震、洪水、干魃、砂嵐、鋭い寒気と焼けつくような暑気と大自然の容赦ない変動に曝され
している。
未開社会では人間は一つの生物として、大自然のなかに群れを作り社会を作り屑を寄せ合うようにして生きている。
遊びもちろんヒトが他の動物に比べて特異なほど発展した脳を発達する生物はないと考えられる。そのことにより
この危険に人間は強い不安感を持つ。何より恐ろしいのはヒトも生物である故に死を免れないことである。ところがヒト
の唯物論の発生性（中）
人の心は自分自身の存在が死によって絶たれるということにかんじき強い不安感を抱く。科学が発達して人間は何故死ぬか理由がはっきりしても、それで人間が死を逃れることはできないから、死ぬのではないか死んだらどうなるかという不安からはなかなか脱け出せない。科学・医学が高度に発達しつつある倫理的な社会主義・共産主義が達成される社会制度が改革をたたにしても、おそらくこの不安から人々は容易に解放されないであろう。人間は自由に住む自由がなければ不自由です。そこで私たちはもはや、人類の生存が社会制度の改革を必要としないわけではない。科学が発達して人間が死を逃れることが可能になるならば、人類の生存が社会制度の改革を必要としないわけではない。
图1

(图示内容未提供，无法翻译。)
端であり、その意味では発音不全である。けっして神のような頭脳・英知を持ちえない。そのことが人類の発生いち

次に、换言すれば、唯一の世界神をもつ宗教によって突破されたときにはじめて、問題が生じてきた。しかる

その世界神が「愛」の神とされているのは、あいさつにおいて、「愛」の神をもつ世宗教をハンバーは規定する。たしかそれらの多くが部族的、氏族的、民族的宗教を、政治的秩序と

教や仏教を「愛」の神をもつ世宗教とハンバーは規定する。「愛」の神をもつ世宗教は、政治的秩序と

緊張はこの上もなくきびしいものとなっているに違いない。原始一自然宗教と異なる歴史時代に入っているような宗教

の秩序はこの上もなくきびしいものとなっているに違いいない。原始宗教によって人間を同胞として考え、人格化された神が、人間に対する「愛」を持つと説

の「救世主」を目標にする生産的・宗教的天才によってこのように洗練され人間的・作り換えられた普遍主義的な宗教

の信仰である。その意味で前沿に住したとおり心や精神による救済のための論理・装置・ビジネスであり、それが人間の魂の救済のための命題・論理であるとされてよい。

問題はこれらの宗教と人々の現実の生活との関係である。部族のアイデンティティを塗り、農耕や狩猟の豊かな

否応なく、宗教者を強く反撲している。少しもその創始者などとの使徒らにおいて、それは明らかに看取でき

固定化に、宗教者が強く反撲している。}
を徹底するとこれらの宗教は国家を解体し、階級差を除去することを目指す変革のイデオロギーであると解
されるのもである。古典古代の奴隷制・土地制あるいは集権的権力による「アジア的生産模式」（マルクス主義）は
そうであるこれらの宗教が原始宗教が一面において持つとおりの意味合いにおいて、現実の社会の政治経済
面との関わりから生まれ構築されたといえそうにも見える。宗教はまた中世のキリスト教、日本の仏教のように
支配のための教義として利用されることもある。このように側面からすれば宗教は現実の社会生活の仕組み
に応じて、その構成形態として成立したといえそうである。宗教は人間の感情運動を表すために、その存在を
現在に伝えているが、宗教は人間の社会生活・経済生活への便宜として役立つ側面もあるとはいいえ、主に魂に
よる魂の救済の装置としての性格を有している。人間が発達した脳を持ち不可避的に独立した精神生活を営むようにな
る。総じて宗教は病む心・悩みある魂への救済の論理・機関として生み出され育てられたといえよう。
要素であるシステムとして宗教は形成され再生成される。「アノヒーニン」、「夢幻覚」（マルクス「資本論」）とい
ってシンプルに片付けられるものではない。宗教の考察から次のこと事が判明する。この社会的要素はその自律性を持つ
けれども、他方では特有な要素として「自律性」を有する。したがって社会の構造や変動、その歴史法則を
掌握するためにには忘られでなければならない特殊な要因を解される。
ところで思想・芸術・文化の歴史はどうだろうか。思想は多くソレン＝当為と結びつき、芸術・文化は社会・
政治・経済など実際の社会生活とさまざまな関わりを持つ。いや、深刻に考えようとする動物であるというのに強く結びついており、発達した頭脳の働きがあって始めて創り出され
ゆる上部構造には、それぞれ自律性を有し個所の存在の理由をもつ個々のメカニズムを持っている。この辺の事情にはマルクスも注目している様子があり、当然ながらこれらの所産をすべて経済・生産力・生産関係等によって規定されたもの、その反映形態と結論してしまうことは許されない。マルクスのいわ
る支配のシステムは経済や社会宗教など多数のシステムにより支配される。
収されるわけではない。支配はそれ自体として発生・存続する強い誘因・理由があり自律的な運動・機能のメカニズムを有する。他の要素システムとの「相互関係」の契機の存在を考えれば「相対的自律性」を有するといえよう。この事情はこれまで考察してきた諸要因を含む社会のすべての構成要因について存在する。ところでおそれを構成する間の支配・被支配関係を支える要素は何であるか。エンゲルスの国家による支配を「公的暴力」の装置として捉えている。国家と支配との関係は重なっている部分も多いがそうでない面もある。つまり支配が安定化する。このことは支配者によっても肯定的に把握されている。支配と国家とは重なっている部分も多いがそうでない面もある。これはたとえば支配者が安定的であるからである。かつ、暴力の独裁は支配の制度を支持しているが、若者なる点については考察の対象である。支配の正当性は成立することを続ける支配である。未開社会にみられる長老制や首長、司祭などについての多くの事例が存在する。支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追求することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。未開社会の部族はしばしば未開社会と限らず、さまざまな社会共同体においてその集団によって必要な特定の職能を遂行することにある。ただし、支配の正当性を追究することができる。
クーデターあるいは植民地支配などのように、武器・暴力の威嚇による直接的な支配を念頭においている。この権力配分にも、正当性を与える種々の努力が行われることはない。しかし、すべてが他の支配の類型に還元され尽くすとは限らない。

ウェーバーが重ねるのは（II）（VI）である。刑法的な支配は支配者の通常的な資質に対する被支配者の心服制にせよ、日常的な慣習とされ、一部はわれわれの（I）職能的支配の司祭や軍事的指導者などのケースに該当する面がある。われわれが（III）の身分的支配と呼ぶのはウェーバーに至る「伝統的支配」と規定されているものである。しかし、この種の支配がとりわけ強大な上関係、支配と服従間関係を軸にしている点からすれば、それに正当性が賦与されているのは慣習、伝統による面もある。支配方と被支配方との間に人格的・身分的な上・下関係を厳として存在することが、ピューティー（崇敬の念をもたせる理由）であり、支配の正当性を与えることになる。身分的支配のなかにはエピテュア・インドなどの夷族の支配、家産制的支配、家畜制的支配の型もある。またその間にヨーロッパに見られたように、君主と諸候との間のギブ・アンド・テイクの契約関係を含むピューティー関係が媒介として入る封建制の支配もあう。

合法的支配は合理的に制定された法令、規則などによる支配である。このタイプは近代になって支配的となるが、ピューティーの民主制にもこの型はあてはまる。合法的支配にも制限民主主義・大衆民主主義・官僚制・独裁制などの支配の類型があるといえようか。これがいうと形式的には合理的な法規の制定をとおすのであるが、その実態は特定の
得る点が多い。かつて国家による直接的統治は法による統治の形態に転換していく。資本主義経済・資本主義的生産関係が支配形態を規定する大きな制約となっています。なぜなら、歴史時代に入りエジプト、メソポタミア、インド、中国などに広範に成立し何千年もの長期に亘って存続した家産制の支配・中央的な君主制の性格はどう解されるであろうか。それは支配形態としての自律性を有するものであったのである。

どうであろうか。その停滞性から推してひととぶ成立した中央集権的支配体制の性格はどう解されるであろうか。それは支配形態としての自律性を有するものであったのである。そのシステムが自律的に再生産されてきたと断定される。問題はどのような中央集権的支配体制が社会と人々を強力に拘束しつづけ、経済的・社会的・文化的にも変動が封じられたと解される理由がある。この面での支配形態としての自律的な機能があり、その理由から人類史の二、三百万年の長い歩みのの中の平均にこの時期になって初めてまで東洋のこの地域だけヨーロッパはアフリカではなく出現したかである。このことを考えると今から数千年前にこれらの地域において農業が営まれるようになったということ、いわゆる「農業革命」が起こった事実を無視するのはいかがた。それによって同一の地域からかかなり恒常的にまた集約的に穀物・家畜などが獲得可能になった。交換もより頻繁に実行されるようになった。村落が作られ、定住によって人々の生活には意識性・計画性が強められたようになった。親族にかわって地縁共同体の演じる役割が大きくなり、隣接する共同体の利害の調整も未開の時代に比べてより重要になったであろう。共同体間の協力も重要になったであろう。周辺の異民族の侵入に対して自らをまた自らのテリトリーをいかにして守るかが忘れることができない課題となった。
－農業革命－によって生まれた新たな生産物の恒常的な産出が可能になったことや、大規模な水利・灌漑事業が必要を増したと
いう経済システムの構造転換である。その時間の経過のうちにこれらの農業地域のなかに、専制的な君主制が現れた。さらに、
次のように述べている（国家形態を伴わない集約的灌漑農業の諸事例が存在することを考慮してみてよ、集権国家と大規模灌漑とが結びついている諸地域では、社会的階層が大規模灌漑が先行するものであるということについて、広範
な証拠が存在する）フリードマンの指摘は頼聴に値する。大規模灌漑が必要とされる理由を追究すると考えられるようになる事実があるにし
ても、その勇なのは地域共同体ないしはその連合でもありうる。未開社会において人類学が教えるように一例えば
ローマ・ソローマが明らかにした婚姻の規範が族部クランなど、の友好関係の維持を留意したものとされるなど。
共同体間の関係については人間は大古以来、いろはの角度から腐食していた。このことから推しても、そのような協調が
全く不可能というわけではない。また、階級関係と一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよう。階級関係も一つの関係を軸にして始めてそれらは実行される。この事業においても、このことから推してもそのような協調が
実施される面が強いうちよ
こうのような支配の発生と発展とは、表面的にみて経済システムとは別の次元での必然的な動きの帰結として起こった。と解されるべきではない。ヒトのヒトに対する支配・服従の衝動は、個人間においても集団間にあってもたんだけの動きは共通体の抑制機能等によってある範囲内に抑え込まれ強度の階級関係・国家権力にまで膨張することは比較的少なかった。ところが、収穫のテトリリーが発生し富の蓄積がみられるようになったと、人間が一定の地域に密集・定着して生活するようになっ

つまり、新たな興奮が非常に大きくなった。いったん征服・支配が実行されると国家は「国家機関・国家権力（……）を中核にしながら、それとその支配下における人民・土地・財宝との交互作用を含む総体」としての形状を整える。つまり、戦争によって（領土・人民・財宝）その他の国家的な富の大きな増大（S）をもとめる「強い傾向を有する農業革命を経ることによって生まれた多様な社会・経済・軍事上の諸条件が人間と社会に内在する支配のメカニズムの大がかりな発動を許した。集権的君主制・家産制の国家の成立は経済システムの発展の文脈においてではなく、何よりもまず「支配」・政治の文脈において把えられねばならないと考えられる。ところで成立した支配の内容として
図1
[No text content is visible in the image provided.]
動によると説き、またその対極にマゾヒズム的衝動もあり、サド・マゾヒズム追求の図式で人間社会に支配・支配関係が極端に定着する傾向があることを支事に挙げ出している。ウェーバーの支配の「正当性」もより根元的に、この人間性の内部の真実に根ざされて考えられるべきであろう。

以上の上部構造的な諸要因の性格吟味をうけて、下部構造ともみなされる経済においても言及しておくことにしよう。筆者が経済学を専攻する立場にあるため、普段はききたい経済に触れる機会が多い。また残りの紙幅を少なくなったので本稿では手短かに記すにとどめよう。経済活動が人間の生存にとって欠かせないことがない要であることは明らかである。たとえばほとんどのすべての生活において、経済が政治や宗教・社会集団・親族などの要素と絡み合って営まれてきていることは否定できない。としえて、経済の存続のために、生産と分配・消費などの活動がそれぞれ一つのシステムとして掌られることがもちろんされている点は、マルクスが強調するより自明の理である。ポラニは市場経済が支配的になった資本主義の時代に経済がさまざまな社会の非経済制度から切り離されたが、他者の時代には経済が支配的になった資本主義の時代に経済がより自明の理である。ウェーバーのポラニにしても、実体の「実在的意味」の経済が高い。

なぜなら、ウェーバーの社会学派の「社会学の大本堅」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」であり第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見方において、社会関係の「土台」である第一義的規定因であると考える見る
（四）広く活用される常識

例edeno.co.jpでの体験型展覧会「岡山市立美術館・草間彌生」について

「岡山市立美術館・草間彌生」の展示にて、観客は彌生の世界を拡がる形で体験することができる。展示作品は、彌生のイカロギ・オブジェなど、多様な形式を含め、観客との関わりを生み出す。個々の作品が持つ深さと美しさが、観客を引き込む。 Campo de Fierroを体験することで、彌生の多様性と包括性が理解でき、その個性を高めることができる。